

42 『解体新書』の原著者

J・A・クルムスについて新史料

石田純郎

安永三年（一七七四年）に翻訳出版された『解体新書』の原書は、一七三四年にライデンで刊行されたG・ディクテン訳の“Ontleedkundige Tafelen”¹⁾、さらにこの原書は一七三二年にドイツ語でダンチッヒ（現グダンスク）で刊行されたJ・A・クルムス（Johann Adam Kulmus）著の“Anatomische Tabellen”（『解剖学表』）第二版である。

演者は一九九六年の五月と十月の二度、ポーランドのグダンスクに赴き、国立グダンスク公文書館、ポーランド・アカデミー・グダンスク図書館などでクルムスに関する新史料を入手した。それは、ダンチッヒのギムナジウムの記録簿に挿入されている「故Jo. Ad.クルムス博士の手稿『医学博士にて正教授のJ・A・クルムスにより、

出来事の記録のために書かれた、一七二五年以降のダンチッヒ・ギムナジウムにおける特別な事柄の私的日誌』からの抜粋」（以後「抜粋」と略す）、学位論文を含む彼の著作、伝記などである。以後の記載で、従来信じられてきた点を正すべき事項には（*）印を付けた。

「抜粋」は六頁で、ラテン語混じりのドイツ語で書かれている。これによるとクルムスは一七二五年五月二三日に、ダンテッヒ・ギムナジウムの医学と自然哲学の教授に任命された。同年の最上学年、八・九年生とその下の六・七年生の授業時間割が示されている。クルムスはこの内、八・九年生へ医学（ニコマ、ただしニコマは六〇分）、自然学（ニコマ）、六・七年生へ自然学（ニコマ）の授業を行なった。この授業科目名からこのギムナジウムの高学年では大学の教養部レベルの学問が教えられていたことが判明する。このギムナジウムはその名称に Academicum が付けられていることから、普通のドイツのギムナジウムより水準が高かった。

J・A・クルムスは一六八九年三月二三日（*）にヴェロツワフで生れた。父はパン焼き職人のアダム（Adam）、母

はマリア・フレゲル (Maria Fliegel)、兄はヤン・イエジイ (Jan Jerzy) である。まずプロツワフのギムナジウムに通い、両親の没後、一七〇四年に兄のいるグダンスクに転居し、そのギムナジウムに通った。一七二一年にハレ、一七二四年にフランクフルト、次いでライプツヒ、シュトラースブルク大学で学び、一七二五年五月二日(*)にパーゼル大学で医学博士号を取得した。その後ライデンでヘルマン・プールハーヴェの講義を聴講した。一七二五年にグダンスク・ギムナジウムの教授に就任した。またグダンスク市嘱託物理学者の公職を遂行した。皇帝博物学協会、ベルリン科学アカデミー会員。一七二一年、雑貨商クシトフ・ロイシュナー (Krzysztof Leuschner) の未亡人、コンコルディア・エーベリング (Konkordia Ebeling) と結婚した。一七四五年五月二九日没。

ダンチツヒのギムナジウムは一五五八年に創立され、Winter Platz (現在名 Targ Maslany) 西のフランチスカナー修道院の建物に置かれたが、一八一二年に廃校となった。

クルムスの著作の一つに、“Fasciculus Exercitationum Physicarum de variis acpraecipuis rebus ad philosophiam naturalem” (『自然哲学各論集成』、一七二九年 グダンスク刊) がある。この本はそれぞれが数ページからなる発表年の異なる三九のラテン語で書かれた小論文の集成で、各論文毎にその論文を提出した学生名が明記されている。どの論文にも指導者クルムスの名前が併記されている。内容は物理学、地学、鉱物学、天文学、気象学、植物学、動物学、解剖学、発生学、生理学、感覚、内科学、薬物学などで、ギムナジウム最終学年における卒業論文と推定される。これらの著作内容から、クルムスは単に内科学だけに興味を抱いていたのではなく、当時、自然哲学と呼ばれた自然科学全体を視野に入れ、教育していたと言えるだろう。

(新見女子短期大学)